

## “「紫式部日記」의 齋院 中將の君の段에 관한 고찰”

愼 仙 香

日語日文学科

### <요 약>

「紫式部日記」에는, 그날그날의 宮廷일을 기록해 놓은 부분과 성격을 달리하는 또 하나의 부분이 있다. 공식적 기록부분이 외부사건을 객관적으로 써놓은 것이라면, 이 부분은 작자의 주관에 살아 있는 수상형식으로 되어 있다. 이 부분을 다시, 작자 자신의 思考를 묘사한 부분과, 對他人批評을 적은 부분으로 나눌 수 있는데, 그 가운데에서, 齋院中將의 段은 후자에 넣을 수 있을 것이다.

이 段에 있어서, 작자는 中宮彰子 後宮의 분위기와 選子內親王 齋院의 분위기를 비교하고, 작자가 속해 있던 彰子後宮에 대한 世評에 대해 변명하고 있다. 이 때, 작자의 논리전개에는, 후궁집단간에 일어날 수 있는 경쟁의식이 강하게 표출되어 있다. 작자에 의하면, 彰子の 후궁집단이 사교성에 있어서는 뒤떨어짐을 인정하지만, 문학적 재능에 있어서는 결코 다른 후궁에 뒤떨어지지 않는다는 것이다. 이를 실제로, 당시의 후궁들의 文芸活動의 측면으로부터 조사해 보면, 작자의 주장이 반드시 무리한 것만은 아니라고 생각된다. 오히려, 작자가 속해 있던 中宮은 平安時代뿐만 아니라, 전일본문학사상에 뚜렷한 발자취를 남긴 여류작가가 일시에 배출된 특이한 집단이었음을 인정하지 않으면 안되는 것이다.

## “「紫式部日記」齋院 中將の君の段についての一考察”

愼 仙 香

日語日文学科

### <要 約>

紫式部日記には、日次による宮廷公事記録の部分とは違った性格を持つ今一つの部分

がある。記録部分が外部の事件を客観的に書きとめているのに対して、この部分は作者の主観を通した随想の形式になっている。この随想部分をさらに、作者が自己の思考を表白した箇所と、他人に対する批評の箇所とに分けることができる。その中で、齋院中将の君の段は後者に入れるべきであろう。この段において、作者は中宮彰子の後宮と選子内親王の齋院とを比較し、我が方すなわち彰子後宮を弁護している。その際、作者の論理の展開には、集団間に起り得る競争意識が強く表われている。作者によれば、彰子後宮は、社交性においては劣ると認められるが、詠歌の才能においては決して他の後宮に劣らないというのである。これを実際に、当時の彰子後宮と選子内親王の女房たちの文芸活動の方面から調べてみると、作者の主張は必ずしも強弁ではないと考えられる。むしろ、彰子後宮は平安時代のみならず、全日本文学史上に鮮やかな跡を残す女流作家たちを一時に輩出した特異な集団であったことを認めなければならないのである。

## I. 序

紫式部日記について研究していく際、その全記事を内容から見て四つの部分に分けて考えることができると思う。すなわち、(1) 土御門邸における中宮の出産および皇子誕生の記録、(2) いわゆる消息文ととられる部分、(3) 寛弘六年某月の中宮御堂詣での条および紫式部と道長との贈答歌、(4) 寛弘七年正月の御戴餅(おんいただきもちい)というふうに分けられるのである。これをさらに外形からみると、(1)と(3)(4)の部分は記録中心の記事であり、(2)は随想中心の記事と言えるであろう。

ところで、日次の記事からなっている他の部分とは違って、(2)の部分は消息的性格をも含み、やや複雑な仕組みになっている。まず作者の紫式部は、自ら仕えていた彰子後宮の若い女房たちの容姿を観察批評し、その結論として「心ばせ」<sup>1)</sup>のむずかしさをあげる。人間の外面に表われる美に對して、その内面の充実を強調してから、次のような段に入っていく。

齋院に、中将の君といふ人侍るなり。聞き侍るたよりありて、人のもとに書きかはしたる文を、みそかに人とりて見せ侍りし。いとこそ艶に、われのみ世にはものゆゑ知り、心深き、たぐひはあらじ、すべて世の人は心も肝も無きやうに思ひて侍るべかめる。<sup>2)</sup>

この段は中将の君と第三者との間に交わされた手紙を作者が盗み見したのに端を発するという。したがって、中宮方の女房たちを主観的観察によって叙述した前の段とはかなり変った書きぶりになっている。ところが、上記の引用文の先を読んでいけば、外面の美と内面の美の調和を最高の理想と主張しつつつけてきた作者は、ここでもやはり人間性のあり方についてふれようとしていることがわかる。いわば、齋院の中将の「文芸的な尊大ぶり及び自負」<sup>3)</sup> に対してその心性を批判せずにはいられなかったので、中将一人のみでなく、齋院<sup>4)</sup> という全集団を分析・批評しているのである。

1) 拙稿「紫式部日記論」(昭和女子大大学院学位論文、1985)、第四章参照

2) 池田亀鑑・秋山虔校註「紫式部日記」、p.65、岩波書店、1964。以下、本文の引用はこの本による。

3) 仲田庸幸、「紫式部の人間観と文芸観」、「愛媛大学紀要(人文学)」、第十三号(1967、12) 参照

作者は、はじめには齋院後宮を攻撃の対象にしているが、すぐ攻撃の矢を我が方へ向けて、御所の主の中宮彰子と、それに仕える女房たちを批判している。主君と仕える者という絶対的な身分の意識をもあえて越えて、手厳しい分析をこころみるのである。つまり、外部からの批評に合わせることで作者の主観的批評で我が方を反省するのである。その際に、大齋院方との対照も忘れず、この段の全体的構造は選子内親王齋院対中宮彰子後宮という二集団の比較による自己確認ないし主張になっている。

ところで、日記の本文をさらに読んでいけば、中將の言ったように、齋院だけが必ずしも秀れた文学集団ではないと強調する作者が、そういう自論の方法に和歌を援用しているのが注意を引く。

平安時代には歌を作る、歌を詠むという事実自体が、ある個人の才能・教養等々の文化水準はもちろん、全人格までを表わすものであった。公私を問わず、和歌は人間生活全般に深く根を下ろし、対人間関係を維持させる社交手段であった。ことに、儀式化された宮廷社会においては、形式的人間関係がもたらした歌の贈答によって可能だったのは言うまでもない。この日記の作者もそういう時代を生きた人間であったことを考えると、後宮集団と集団間の相互比較に歌を尺度としたのはうなずける。そこで、本稿では、選子内親王齋院と中宮彰子後宮の文芸からの考察に範囲をしばって日記を読んでいくことにする。

## II. 選子齋院、定子後宮、彰子後宮

### 1. 「ただいとをかしう、よしよしうはおはすべかめる所」

前に引いた本文でみるように、中將によれば選子のみが世の中で秀歌とオのある歌人をわきまえ得る唯一の人であり、その御所では風流の社交生活ができるという。これに対して紫式部は「げにことわりなれど」と一応肯定する態度をとるが、直ちに反論を述べる。

わがかたぎまのことをさしもいはば、齋院よりいできたる歌の、すぐれてよしと見ゆることに侍らず。ただいとをかしう、よしよしうはおはすべかめる所のやうなり。<sup>5)</sup>

当時、齋院御所の主は選子内親王であった。選子内親王は、世に大齋院と呼ばれたほど、平安時代末期の円融・花山・一条・三条・後一条の五代約六十年間にわたって齋院について、有力な後宮文化を築きあげた。賀茂齋院記<sup>6)</sup>によると、選子内親王は康保元年(964)四月二十四日、村上天皇の第十皇女として生まれた。これと関連する参考資料は多くあるが、「大鏡」の「右大臣師輔伝」<sup>7)</sup>と、「今昔物語集」の「村上天皇御子大齋院出家語」<sup>8)</sup>によっても、その人物・人柄を十分うか

4) 「齋院ハイツキノミヤト云ヒ、又字音ニテ、サイキントモ云フ、皇女ノ賀茂大神ニ奉事スルモノヲ云フ、其院ハ山城国愛宕郡紫野ニ在ルヲ以テ、一ニ紫野院ト称シ、有栖川ノ側ニ在ルヲ以テ、有栖川トモ云フ、初メ嵯峨天皇ノ朝、平城上皇復祚ヲ圖リ給フニ由リ、天皇密ニ賀茂大神ニ御祈願アリテ、皇女ヲ以テ承事セシメント誓ヒ、事平ギテ後、弘仁元年四月、皇女有智子内親王ヲシテ、恒ニ潔齋奉祀セシム。齋院蓋シ此ニ始マル、爾後歴朝相承け、登極ノ初ニハ、必ズ皇女或ハ皇孫ヲ遣シテ奉祀セシメタリシガ、後鳥羽天皇ノ皇女禮子内親王以後ハ、終ニ廢絶セリ。」(「古事類苑 神祇部64 賀茂神社4 齋院の部より)

5) 本文 p.66

6) 群書類従 卷四十四「賀茂齋院記」(東京：内外書籍株式会社、1931)、p. 570

7) 日本古典文学大系21「大鏡」(東京：岩波書店、1960)、p. 122~p. 123

8) 日本古典文学大系25「今昔物語」(東京：岩波書店、1962) p. 97~p. 99

がうことができる。このうち、「大鏡」の記事は、選子内親王が齋院奉仕の外に、今一つの信仰すなわち佛教にも傾倒していた事実を伝えている。つまり、内親王は天延三年(974)六月、賀茂齋王に卜定されてから長元四年九月に退任するまで、宮廷の神に奉仕する身分でありながら、同時に佛教にも心酔して深い信仰心をもつようになったのである。例えば、内親王の「発心和歌集」には五十五首の歌が収められているが、そのすべての歌は、佛教への帰依によって極樂往生を祈願したものである。これが齋院の純粋な家集といえるなら、永観二年(984)より寛弘九年(1011)の間になされた「大齋院前御集」と、長和・寛仁年間の「大齋院御集」は選子内親王後宮の代表的和歌集といえる。齋院のみならず、それに仕えていた女房たちの詠歌や、そこに出入りしていた公卿・殿上人との贈答歌で構成され、集団の性格をもっている。したがって、齋院という特殊な御所と外部がどのようにつきあっていたかを調べるにはもっともよい資料であるが、それについては第三章でもう一度ふれることにする。この章では、齋院と彰子後宮、それに先行する定子後宮を比較し、それぞれの後宮がどのような関わりをもっていたかについて考察してみよう。

ふたたび、前記の本文引用へもどるが、作者の紫式部は、齋院を有名な文学集団と世に認められるようにならしめたのはあくまでも選子内親王一人の才能と功績といたそうである。言いかえれば、そこに仕え、文芸サロンの構成員となった女房たちに対しては、よい点数をつけようとしな。それだけでなく、本文中には明らかに対抗意識ないし敵対心が表われている。同じ齋院方の人物といっても選子内親王だけには頭をさげざるが、その女房たちはないがしろにする姿勢が見える。要するに、作者は齋院全体に対しては好感をもっていないのである。これとよく対照されるのが清少納言の場合である。

藤原定子に仕えていた清少納言が「枕草子」を書きはじめたのは、長徳二年(966)のことである。<sup>9)</sup> 当時、定子は未だ一条天皇の中宮の位にあったが、長保二年左大臣道長の娘彰子が入内し、引き続いて中宮となることによって、定子は前例のない<sup>10)</sup> 皇后の位にあがるようになった。これまで一条朝の後宮は定子を中樞にして動いていたのであるが、ここには清少納言・宰相の君(藤原重輔の娘)などの才媛が集まっていた。ことに、清少納言は誰よりも天賦の機知と才能・漢学をもって定子後宮だけでなく、全宮廷の賞賛をあびながら、その後宮が社交かつ文芸サロンとなるのにおおいに活躍したのである。そのような清少納言について、この日記の作者紫式部は「したりがほ」「まな書きちらしてはべる」「えんになりぬる人」というふうに貶しめ、「そのあだになりぬる人のはて、いかでかはよくはべらん<sup>11)</sup>」と呪詛に近い結論をくだしている。しかし、清少納言の積極性は定子の陽気な気性に適応しようと努力した所産であって、彼女をめぐるあらゆるエピソードも、このような主従関係<sup>12)</sup>なくしては生じなかつたのであろう。ここでしばらく、定子の生きた跡をみてみよう。

中宮定子の父親道隆が長徳元年(965)急逝した時、今まで彼の手にあつた朝廷の政権はその嗣子の伊周にでなく、弟道長の手に移る。翌年、伊周は花山法皇に対する不敬事件を問われて大宰権帥に左遷される。五年後、伊周は京都に呼びもどされるが、すでに大勢は叔父の道長にしたがうようになっていた。まもなく、寛弘七年(1010)、伊周の死によって定子実家の中関白家は没落

9) 「枕草子」の成立年代については諸説が出ているが、ここでは日本古典文学大系19「枕草子」(岩波書店、1958)の解説にしたがう。

10) 土田直鎮、「日本の歴史」5(東京：中央公論社、1965) p. 149

11) 本文 p. 73

12) 石田穰二、「後宮女房の意識について」、「国文学」、(1963. 5) p. 49

してしまう。しかし、定子は、道長の御堂関白家の天下になり、後見者の父親も実弟もなくなった不遇の時代にも、後宮の最高者たる言動に変わりがなかったと清少納言は見たのである。「枕草子」はそういった主君への讚美を第一の執筆目標として長保二年(1000)定子が没するまでのことを書きとどめている。

では、この定子後宮は、少し先行して、なお同時代の後宮として並存した選子内親王の齋院とどのような関わりをもっていたか。これについての参考資料はさまざまな事情のためかあまり多くみつからないが、「枕草子」の87段がよい例を提供している。この段では主として長徳四年の暮れから翌年の正月までのできごとを取りあつかっているが、その前半に、選子齋院と定子後宮との交際をうかがわせるひとつのエピソードが出てくる。

局へいととく下るれば、侍の長なる者、袖の葉のごとくなる宿直衣の袖の上に、あをき紙の松につけたるを置きて、わななき出でたり。「それはいづこのぞ」と問へば、「齋院より」といふに、ふとめでたうおぼえて、とりてまゐりぬ。

まだおほどのごもりたれば、まづ御帳にあたりたる御格子を、碁盤などかきよせてひとり念じあぐる、いとおもしろ。片つかたなればさしめくには、おどろかせ給ひて、「などきはすることぞ」とのたまはすれば、「齋院より御文のさぶらはんには、いかでかいそぎあげ侍らざらん」と申すに、「げに、いと疾かりけり」とて、起きさせ給へり。<sup>13)</sup>

個室へ退出しようとした所、齋院から中宮のもとに消息をよこしたのでそのまま朝早く異例の取次ぎをする。清少納言のあわただしい行動にもかかわらず、齋院からの手紙だと知って中宮は、「げにいととかりけるかな」と頷く。そして、「山とよむ斧の響を尋ぬればいはひの杖の音にぞありける」と、お正月の祝いを詠んで齋院に返事する中宮の様子がとてもすばらしく見えたという。「齋院にはこれよりきこえさせ給ふも、御返しも、なほ心ことに、書きけがしおほう、用意見え」の中宮であっただけに、清少納言も自然に主君の態度にしたがえるようになったのであろうか。大齋院方に対する紫式部の書きぶりとは反対の記事になっている。「枕草子」の本文中で、選子齋院に関してふれたのは上記の引用文しか見あたらないが、これだけでも齋院と定子後宮の間に流れていた親愛と尊敬心の濃度が十分に読みとれると思われる。では、「枕草子」において、主従ともに大齋院に対してああいっただ好感一辺倒の文になったのはなぜなのであろうか。それを知るために、選子齋院と定子後宮、それから彰子後宮といった三集団がそれぞれどのような気風を持ち、それぞれどのように交際し続けて、王朝最高の女性文芸時代に共存していたか簡単に見ておこう。

第一に、大齋院選子と中宮定子の関わりはその気風の共通点からみていかなければならない。「枕草子」が記したように、齋院と定子の生活そのものは王朝時代の「みやび」をそのまま実現していたようである。正月の一日がちょうど卯の日であるのを折に、邪気拂いの卯槌を山の草木で飾ったものを贈る大齋院の風流を定子もよく理解し喜んだのであろう。このように、両者は風雅な和歌のやりとりを続けたと思われるが、定子は文学をはじめさまざまな教養を身につけていた

13) 日本古典文学大系19「枕草子」(東京:岩波書店、1958) p. 131

14) 「枕草子」23段、99段等 参照

らしい。例えば、古今集などの古歌に心酔したり<sup>15)</sup>、漢詩文を引いて側近の人々と応答したり<sup>16)</sup>する一方、絵にも造詣が深かった<sup>16)</sup>という。定子は自分だけでなく、宮仕えの女房たちがその才能を自在に発揮できるように奨励し、殿上人たちとも積極的に風流を交わすようにさせたのである。清少納言が、明瞭で知的な雰囲気の後宮で自己の存在を認められ、その恩返しとも言えそうな「枕草子」を書いたのも他ならぬ主君および主家への称賛のためであった。定子後宮の風流かつ積極的な氣風と似通ったもう一つの後宮が選子内親王の齋院であった。京都西北の紫野の齋院御所は四季折々の変化が楽しめる所であった。そういう地理的条件に加えて、当時の宮廷社会から離れた閑寂な生活は必然的に選子内親王はじめ女房たちの関心を文学活動などに向かわせたのであろう。このようにみると、環境こそ異っているが、定子と選子の両後宮は同じ気風をもっていたことがわかる。「枕草子」のわずかに一段に込められた両方間の親密感、似通う者同志でなくては得られないものであった。これに比べて、中宮彰子とその後宮はよい対照をなしている。

## 2. 「されど、内わたりにて、明け暮れ見ならし……」

日記の本文を読んでいくと、次のような記事に出あう。

されど、内わたりにて、明け暮れならし、きしろひ給ふ女御・后おはせず、その御かた、かの細殿と、いひならぶる御あたりもなく、をとこも女も、いどましきこともなきにうちとけ、宮のやうとして、色めかしきをば、いとあはあはしとおぼしめいたれば、すこしよろしからむと思ふ人は、おぼろげにて出でる侍らず。心やすく、もの恥ぢせずとあらむかからむの名をも惜まぬ人、はたことなる心ばせのぶるもなくやは。たださやうの人のやすきままに、たちよりてうち語らへば、中宮の人うもれたり、もしは用意なしなどもいひ侍るなるべし<sup>17)</sup>

要するに、ここに書かれているのが、彰子後宮の実情であった。この日記が取り扱っている寛弘五年頃には、すでに定子も死んでいて、一条朝の後宮はほとんど彰子一人が独占していた。女房たちも「いどましきこともなく安易に過ごしている上に、中宮は何かにつけて人目を引くようなことを浅ましく思う。それで、そういった主君の意を適えようとする女房は自然に引込みがちになり、少し劣る女房たちだけが無風流に外部の人々と接する。その結果、「中宮の人うもれたり、もしは用意なし」とされる。もはや競争すべき後宮もない実情ではあるが、日記の作者紫式部は現在の状況に甘んずるわけにはいかない。彼女の意識中には、すぐ隣りに見えるわけではないが、現に存在している選子齋院の名がや、「枕草子」が伝える定子後宮の活躍が常にあったのであろう。それらの後宮に対する世の好評とは反対に、自分自身の仕える後宮によせられている世評はどうであるか。それに対して執拗にまで抗弁しているのが、この齋院中将の段と見られる。以下、日記の本文に沿って中宮彰子の後宮とそれをめぐる外部関係を見てゆくことにする。

作者は自己弁護をまず、彼此比較から始める。「をかしき夕月夜、ゆゑある有明、花のたより、時鳥のたづね」「いと世はなれかんさびた」所なので、齋院は趣き深く過され、煩わしい公事に出

15) 「枕草子」278段、292段、299段等 参照

16) 「枕草子」23段、184段等 参照

17) 本文 p. 67

あうこともない。中宮御所のように、「うへにまうのぼらせ給ふ、もしは、殿なむまゐり給、御とのゐなるなど、ものさわがしき」時もない所柄ゆえ、ありたけの風流ができるのは当然なのである。そういう齋院と宮廷の煩雑多忙な生活にならざるを得ない我が方とは、もう比べものにならない。このように、その環境においては不利であるが、作者自身をはじめ彰子後宮の女房たちがその素質においては他後宮の女房より少しも劣らないと弁護する。

かういと埋れ木を折り入れたる心ばせにて、かの院にまじらひ侍らば、そこにて知らぬ男に出であひ、ものいふとも、人のあうなき名をいひおほすべきならずなど、心ゆるがして、おのづからなまめきならひ侍りなむをや。ましてわかき人の、かたちにつけて、年よはひに、つつまじきことなきが、おのが心に入れて懸想だち、物をもいはむとこのみたちたらむは、こよなう人におとるも侍るまじ。<sup>18)</sup>

齋院と同じく世俗の煩雑さもなく、花鳥風月の興趣にふけられる環境にいるなら、作者自身のような「うもれぎを折り入れた」人柄もおのずと優雅な風流を習うであろうのに、いわんやまだ年若い女房たちにおいてをや！ 詠歌の興趣を理解して、風流の社交を楽しめる素質には彼此とも変わりはないが、環境の事情でこうなっただけであるという。このように我が後宮を弁護している論法を詠歌の環境論<sup>19)</sup>とまとめ得るなら、ここで当時代の和歌の用いられ方について簡単に考える必要がでてくる。

平安中期から後期に最盛期を迎えた摂関政治がはじめて具体的に行われだしたのは清和朝の貞観年間、藤原良房によってであった。それ以来、藤原氏による摂政・関白政治制度は固まっていたが、男性政治家の権力下で日本歴史にまれにみる女性中心の文化を産んだことは、この時代のもっとも大きな特長といえよう。もともと、摂関政治というのは、皇族か藤原氏の最高少数貴族たちがその娘を入内させて天皇の外戚となり、その地位をもって権力をもっぱらにする制度であったので、そういう社会では諸後宮間の競争は避けられないことであった。摂政・関白につく者は、天皇一人の男性をかこんで妍を競うあらゆる後宮の中で、できるだけ自分側を抜んでたものにしようと、さまざまな工夫をこらしたのであろう。それには、後宮の文化水準を高める方法が何よりも効果的であった。こういった権力層からの要求と、その権力を求心点の範囲として自由な自己表現を期待した集団、すなわち宮仕え女房たちの働きが結びついて、いわゆる後宮文学ができたのである。<sup>20)</sup> このような場において、女流作家による和歌・物語・随筆・日記などの数多い作品の制作が可能であったのだが、その中で、和歌はすべての文学の基底となり、日常生活にあっても一手段となったのである。既に述べたとおり、当時の人間は対他人あるいは対他集団との交通において歌を媒介体とし、その詠歌教養の養成に努めた。

そういう時代に、藤原道長が約三十年間にわたって天皇に代る最高権力者になり得たのも、三人の娘の後宮を背後に持っていたからであろう。彼は長女の彰子を入内させると同時に、その後宮に良家出身の才媛を女房として呼びよせ、文化の高揚をはかった。この日記の作者紫式部も、

18) 本文 p. 67

19) 萩谷朴、「紫式部日記全注釈 下巻」(東京：角川書店、1973)、p. 226

20) 三谷栄一、「後宮における精神生活」、「国文学」(1963.5)

そのような意図下で宮仕えに出た一人であった。しかし、彼女は自分が中宮の教養係のような仕事<sup>21)</sup>を担当するという自負からか、後宮女房の立場を単に「もののかざり」としてだけに受け入れるのには満足できなかったらしい。主君のために仕えるには、たずねてくる殿上人たちを応対し、時には彼らと優雅な歌の贈答もできなければならない。が、実情は紫式部の望みとはうらはらだったのである。

彰子後宮に対する世評は、「中宮の人うもれたり、もしは用意なし」というのであった。作者にあっては侮辱ともとられる世評に対して、抗議し、我が方を弁護するつもりで書いたのが、この節の冒頭に引用した箇所と思われる。日記によると、中宮方が現在のように沈滞している原因は無風地帯になったためであるが、それにもう一つ中宮自身の性格や態度にも由る。つまり、中宮彰子は色めかしく人目に立つ行動を慎んだので、その女房たちも自然に主君に合わせようとして消極的な態度をとるようになったのである。その結果、引込み思案だ(うもれたり)、心遣いがない(用意なし)などと言われるようになったのだが、そういう世評を必ずしも否定するわけにもいかない。その事実、彰子後宮の上藤・中藤の女房たちは、「あまりひき入りぎうずめきてのみ」いるので、我が方ながら見ぐるしいのである。「人はみなとりどりにて、こよなう劣りまさることも侍らず。そのこと敏ければ、かのことおくれなどぞ侍るめるかし」<sup>22)</sup>と、一步譲って考えはするが、やはり今のように無風流であってほしくはない。中宮の本意ももとより今のようなものではなかった。中宮が現在のようになったのはある不幸な事件のためであると、作者は解明に入ろうとするが、以後の文章は、この中将の段の前半を更に補ないながら広げる自己弁護と考えられる。

彰子後宮は、他の後宮よりもっとも強い政治権力に支えられているにもかかわらず、文化なし文芸サロンとしては他集団より優れているという評判は得ていない。それが日記の作者紫式部にははがゆく思われて、本文のような現実分析と自己弁明を繰り返さずにはいられなかったであろう。

さるは、宮の御心あかぬところなく、らうらうしく心にくくおはしますものを、あまり物づつみせさせ給へる御心に、何ともいひ出でじ、いひ出でたらむも、後やすく恥なき人は世にかたはものとおぼしならひたり。げに、物のをりなど、なかなかなることしいでたる、おくれたるには劣りたるわざなりかし。ことにふかき用意なき人の、所につけてわれは顔なるが、なまひがひがしきことも、物のをりにいひいだしたりけるを、まだいとをさなきほどにおはしまして、世になうかたはなりと聞こしめしおぼしみにければ、ただことなる咎なくて過ぐすをただめやすきことにおぼしたる御けしきに、うち兒めいたる人のむすめどもは、みないとよかなひきこえさせたるほどに、かくならひにけるとぞ心えて侍る<sup>23)</sup>

日記の作者から見れば、中宮彰子は、不足することなく、け高く、重厚な姿である。皇子降誕の頃にも、落ち着いた態度に変わりなく、国の母とさわがれる最中でも美しくしずまっていた中

21) 「紫式部日記」の本文には、紫式部が中宮に「白氏文集」の拾い読みをしたり、「新樂府」二巻の進講をしたりする記事が書かれている。(本文 p. 79 参照)

22) 本文 p. 68

23) 本文 p. 68



宮<sup>24)</sup>と主家に対する讚美は「紫式部日記」の大半を貫いている。しかし、中宮の地位にふさわしいおっとりした態度や慎しみ深い性格が、色々な女房の集まった後宮のリーダーとしては必ずしもよいとは言えない。

中宮は年若い頃、ある女房の軽拳に衝撃を受けて以来、「ことなかれ主義」になったわけである。この主君に仕える女房たちも安逸な姿勢で、人前に出たがらなくなってしまうが、そのような同僚に対して作者は「うち兒めいたる人のむすめども」といつている。この辺には、常に作者の意識中に潜んでいる自尊心がもう一度顔を出しているように思われる。

日記の作者紫式部が、いわゆる中流貴族の受領層<sup>25)</sup>の出身であるのと同じく、平安時代の宮仕え女房は、少なくとも中流以上の子女でなければならなかった。したがって、中宮彰子の後宮にも、中流出身の女房のみでなく、むしろ道長に追従する上流貴族たちが争って自分の娘を後宮に入れさせていた。<sup>26)</sup> これらの女房たちが中宮と外部の人々との取次ぎを担当していたのである。次の引用文は殿上人と中宮をつないで、円滑な関係を作りだすべき女房が、実際にはその役割を全うできなかったことを伝えている。

まづは、宮の大夫まゐり給ひて、啓せさせ給ふべきことありけるをりに、いとあえかに兒めい給ふ上臈たちは、対面し給ふこと難し。また、あひても何事をか、はかはかしくのたまふべくも見えず。言葉の足るまじきにもあらず、心の及ぶまじきにも侍らねど、つつまし、はづかしと思ふに、ひがごもしらるるを、あいなし、すべて聞かれじと、ほのかなるけはひをも見えじ。<sup>27)</sup>

これは中宮大夫の藤原齊信が彰子に何か申すべきことがあって、その取次ぎを「あまりひき入りぎょうずめきてのみ侍る」女房にたのんだが、所期の目的をはたせなかったことを一例としてあげている。なまじっか対応に出てやりそこなうより、顔を出さない方がよいとする女房たちを批判し、「姫君ながらのもてなし」に懷疑を示している。本文では、このようなお嬢さん育ちのままの女房が具体的に誰々を指しているかは明らかではない。ところが、この段の直前<sup>28)</sup>まで宰相の君・大納言の君・小少將の君など、上臈女房に対してその容姿・人柄をほめてきた作者が、ここに至っては彼らの消極性を批判しているのである。その理由は、現在宮廷でつきあっている上流出身の人々を見る作者の視線が非常に屈折していたからではないだろうか。こういう対外視線は、我が方すなわち中宮彰子方に対しても例外ではなかったのである。

紫式部の出仕の動機については、見解がほぼ統一されている<sup>29)</sup>。まず、その一つには、夫の藤原宣孝に先立たれてからの漠然とした生活の打開と、もう一つ家の繁栄とかかわる重要な目標があった。紫式部は、受領階級としてこれ以上のぞみのなくなった実家のために、道長家の人になってその庇護を受けようと、彰子後宮への出仕を決心したのである。この出仕以前からすでに

24) 本文 p.7、p.27の記事参照

25) 紫式部の事歴に関しては、今井源衛、「紫式部」(東京：吉川弘文館、1980)による。

26) 例えば、小右記長和二年七月十二日の条には、為平親王の子である源憲定の娘が彰子の後宮に出仕するようになったことが書かれている。また、栄花物語にのつばみ花の巻には、長和二年、太政大臣藤原為光の娘がやはり彰子後宮に出仕したことを書きとどめている。

27) 本文 p. 70

28) 本文 p. 60~p. 65

29) 今井源衛、前掲書、第八章 参照

「源氏物語」を書きはじめていて、作者として名が知られ、才女を呼び集めていた道長の期待と、紫式部自身の必要性があいまった結果、女房になったわけなのである。幼い時から天賦の才能に強い自負心を持ち、優越感を育てて来た紫式部だけであって、ただその才能のみで世に立とうとした時、身分意識に相当気を使わずにはいられなかったであろう。日記の本文中でも、現在の状況に向かいあって心の葛藤を繰り返しているが、家集の「紫式部集」の詞書や歌<sup>30)</sup>などにも、最初に宮廷に出た時のさまざまな思念が書かれている。このようにみえてくると、紫式部の宮仕え生活は個人的環境の要求から始まったのであるが、もし中宮御所の雰囲気は彼女の気性と合ったならば、日記にみえる複雑な文章はできなかつたと思われる。清少納言のように我が身のほどを十二分認識して、適当に妥協するという態度ではなく、紫式部の場合は傍観者にとどまるのであつた。それはともすれば、外部に対して容赦なく批判をし、自分自身に対しても懐疑的になつた。

「枕草子」に表われているあの美しい空気と人間模様とは正反対の彰子後宮において、己のすべてを発揮できないことからくる憂うつ感。作者自身よりはるかによい出身とは言え、才能や教養、学問などの面ではそれほど見所のない上流の女房たちに対する厳しい批判は、公人としての姿勢を言う原則論でもある。一応、宮仕え女房になつた以上は、主君の為に働くのと同時に自らをも修めて、つまるところは他の後宮より抜きんでようとしなければならない。こういった原則の上で、もつと積極的態度であるべきだと強調している。中宮彰子も今ではもう地味な言動と無難な気性をよしと思わなくなつたのである。

いまはやうやうおとなびさせ給ふままに、世のあべきさま、人の心のよきもあしきも過ぎたるもおくれたるも、みな御覽じしりて、この宮わたりのことを、殿上人もなにも目なれて、ことにをかききことなしと思ひいふべかめりと、みな知ろしめいたり。

さりとして、心にくくもありはず、とりはづせば、いとあはつけいこともいでくるものから、なさけなくひき入りたる、かうしてもあらなむとおぼしのたまはずれど、そのならひなほり難く、<sup>31)</sup>

このように、政治的背景や構成員の環境の面では他の諸後宮より恵まれているにもかかわらず、実際には沈滞した気風の彰子後宮の名譽回復こそ、作者の願うことであつた。その念願が強ければ強いほど、他集団との比較意識も鋭くなってくる。このような立場から作者は、当時最高の文芸集団の選子齋院を分析している。そうして、あらゆる条件で中宮御所とは比較できない理由、つまり両集団の持つ固有性ないし異質性をひとつひとつ取りあげて文化の違いを説明しようとする。

をかきき夕月夜、ゆゑある有明、花のたより、時鳥のたづねどころにまゐりたれば院はいと御心のゆゑおはして、所のさまはいと世はなれかんさびたり。またまぎることもなし。

30) 「紫式部集」の55番歌から63番歌まで一群の歌は、宮仕えに出て以来経験したさまざまな思念を詠んでいるが、特に57番歌「身の憂さは心のうちにしたひきていまここのへぞ思ひ乱るる」には、「はじめて内わたりを見るにも、もののあはれなれば」と詞書してある。これは、はじめて宮廷に出て、今までの「心憂」から脱しようとしても、かえって外界と自己の内面世界との間には大きなへだたりが生じることを悩み続けた作者の自覚を表わしたのである。

31) 本文 p. 69

うへにまうのぼらせ給ふ、もしは殿なむまゐり給ふ、御とのみなど、ものさわがしきをりもまじらず、もてつけ、おのずから知りこのむ所となりぬれば、艶なることどもをつくさむなかに、なにの奥なきいひすぐしをかはし侍らむ。<sup>32)</sup>

当面の問題は我が方と敵方ともいえる齋院との比較であり、両集団の性格が異ならざるを得ない点を明らかにすることである。しかし、上記の引用文には、相手の齋院御所を観察、分析するという作者の意図の他に、今一つある意識が読みとれる。すなわち、齋院御所を自己発顯の可能な場としてあこがれを寄せているのである。中宮の女房でありながら齋院の文化的雰囲気憧れる潜在意識があるがために、かえって彰子をもっと理解しよう、讚美しようと努めたのではないだろうか。

ところで、現在残っている幾つかの資料によれば、紫式部日記が書かれた当時、彰子後宮と選子後宮との間に相互交流がまったくなかったとは考えられない。むしろ、両後宮は同時代におけるよき競争相手として、刺激しあつたらしい。両後宮の主である中宮彰子と選子内親王がどのように交際していたかということは、その女房たちの集団間の関わりにも影響したが、ここで両後宮の交流について簡単に調べてみることにする。

まず、公式記録上に表われたのをひろってみると、「御堂関白記」の幾つかの記事がある。その寛弘元年四月二十一日条に「廿日。癸酉。近衛府使許。舞人下製送。中宮被奉齋院扇。云々」、同二年五月五日条に「五日。壬子。参所者。薬生持来。賜祿。従中宮。齋院被奉薬生。云々」、同六年七月七日条に、「七日。庚申。(中略)従齋院。中宮。琵琶。琴等被奉。是其形や。入腹中扇等。使者仁久。馬を捕留。給祿云々」と、それぞれ書かれている。これらの記事はいずれも「御堂関白記」の筆者の道長が彰子の後見者たる立場にあっただけに、詳しい内容になっている。中宮が先に齋院へ扇を送ることによって二人の交際が始まったわけであるが、選子にとって彰子は、中宮という地位の人物としてではなく、時の最高権力者道長の娘として重く考えられたのではなからうか。一般に、天皇が変れば齋院も改まるにもかかわらず、大齋院の場合は五代にわたって五十七年もの長い間、賀茂の齋院についていられたのは、藤原氏の摂関政治の伸張とつながりをもっていたからである。

一条・三条・後三条の三朝をほしいままにした道長のみならず、それ以前の中関白家との密着は、前節でふれたとおり、「枕草子」の断片的記事からでも十分うかがえる。もちろん、選子が中宮定子と交際したのは、二人とも王朝の雅びを所持したという個人的共通点にもよつたろうが、自己の社会的地位を確実にしようとした意図も働いたと考えられる。このように政治情勢判断に鋭い感覚をもっていた選子が、当代最高権力の御堂関白家との間柄にも格別な心配りをしたことは、十分納得できる。例えば、大鏡師輔伝によれば、道長の息子頼通が幼少の時齋院の御禊の前駈をつとめたことがあるが、その場にいた選子は祿を別に用意していなかったので自分の着ていた小袿を脱いで与えたという。これを聞いた道長は、「いとをかしくも給へるかな、祿なからんもたよりなく、とりにやりたまはんもほどへぬべければ、とりわきたるさまをみせたまふなめり。ゑせものは、えおもひよらじかし」と、齋院の機知を称えたという。<sup>33)</sup>また、賀茂祭で齋院の

32) 本文 p. 66

33) 「大鏡」(岩波書店、1960)、p. 123

行列が通りかかる時、道長が幼い孫(後の後一条・後朱雀天皇)を見せたところ、選子は輿の帷から扇のつまを出してあいさつした。これをみた道長をはじめ人々は、「なを心ばせめでたくおはする院なりや。かかるしるしをみせたまはずは、いかでか、みたてまつりたまふらんともしらまし」と、齋院の気の利いた行動に感激したという。<sup>34)</sup> 要するに、選子側からは道長を頼って自己の地位の安定を図ったのであるが、道長側からもやはり大齋院選子の名声を買って味方にしようとしたのであろう。したがって、選子と彰子の仲がよかったのは当然のことであった。その例として、前に引いた記事は言うまでもなく、「源氏物語」の執筆をめぐって二御所の交流があったらしい。

「賀茂齋院記」には、「選子在齋院之間。凡歴五代。当時称大齋院。選子善詠倭歌。嘗遣人于上東門院。請見新奇之草子。於是上東門院命紫式部。新撰源氏物語以遺之。(後略)」の記事が書かれている。選子内親王が彰子に新奇な草子すなわち物語を請うたところ、彰子は女房の紫式部に命じて源氏物語を著わさせたということは、「河海抄」<sup>35)</sup>、「花鳥余情」<sup>36)</sup>の古注釈書も記している。これらの資料を裏付ける根拠はいまだ確かではないとしても、当時彰子後宮と齋院はかなり頻繁につきあっていたことが推量される。

ところで、平安時代において対人関係の仲介役となっていた和歌の方から見ると、中宮彰子側と大齋院選子側はわずかに二回の贈答しか交わしていない。例の賀茂祭で、敦成親王と敦良親王にあいさつかわりに扇のつまを出してみせた折、選子は彰子に和歌一首を贈っている。後拾遺和歌集に載った選子の歌「ひかりいづるあふひのかげをみてしかはとしへにけるもうれしかりけり」(雑五 1107番)は、「後一条院をさなくおはしましける時、まつりごらんじけるにいつきのわたり侍りけるをり、入道前太政大臣いただきたてまつりて侍けるをたてまつりてのちに、太政大臣のもとにつかはしける」と詞書してある。この歌に、中宮の代わりに道長が、「もろかづらふたばながらもきみにかくあふひや神のしるしなるらむ」(同集 1108番)と返している。この他にも「後拾遺和歌集」には、「後一条院御時、賀茂行事はべりけるに、上東門院みこしにのらせ給ひてむらさきのよりかへらせたまひける又のあした、きこえさせはべりける」と、詞書して、「みゆきせしかものかはなみかへるさにたちやよるとてまちあかしつる」(1109番)と詠んだ選子の歌がある。これに対して彰子は、「後一条院くらゐにおはしましける時、賀茂社に行幸ありける又の日のあした、選子内親王の御返事のついでに」と詞書して、「たちかへりかものはなみよそにても見しやみゆきのしるしなるらん」(続後撰和歌集 神祇 549番)と詠み返している。それから、万寿三年(1026)、彰子が出家した時、晩年の選子は「上東門院あまにならせたまひけるころよみてきこえける」と詞書して「きみすらもまことのみちにいりぬなりひとりやなぎやみにまどはん」と詠んでいる。この歌への返歌としては、道長が「跡垂れて人みちびきにあらはるるその宮仕へまどひしもせじ」と答えた、栄花物語<sup>37)</sup>に書かれている。

以上の例から考えれば、選子と彰子は道長という仲介者が存在してこそ、交わり続け得たといえよう。要するに、両者の親交は、中宮定子と選子の間に流れた理解と親愛の情とはもとより異なつたのである。それは定子と彰子の個人的性向とその生き方がそれぞれ違っていたためであつ

34) 「大鏡」(岩波書店、1960)、p. 124

35) 石田穰二校訂「河海抄」巻一(東京：角川書店、1978)、p. 186

36) 中野幸一編「花鳥余情」(東京：武蔵野書院、1978)、p. 3

37) 日本古典文学大系76「栄花物語」(東京：岩波書店、1965)、p. 80

たし、したがって、その後宮の気風も自然に独特のものになったので、止むを得なかったと考えられる。

### III. 「さぶらふ人をくらべていどまむには……」

彰子後宮と選子御所が、一条天皇を頂点として藤原道長の勢力の庇護下で共存した集団だったのは、第二章で述べたとおりである。このように、二御所は共存しながら相手方を認めてはいても、それには諸集団間に起こりやすい競争意識ないし敵対感情が常につきまとっていたようである。この日記の作者紫式部にあっても事情は同じであって、相手の優越性を認めているようで、その事実認めていない。日記には、「齋院よりいできたる歌の、すぐれてよしと見ゆることに侍らず」と書かれているが、これに引き続いて大齋院方と我が方との優位比較論が始まる。両後宮の比較における「風流」「社交性」の側面は既述したとおりであって、ここではその「文学的側面」つまり「和歌」のことについて考察してみることにする。

まず、各々の女房の詠歌がどの勅撰集に何首入集されているかを調べてみよう。「勅撰作者部類」<sup>38)</sup>によると、古今集より新統古今集までの十三代集に入集されている女房は、彰子後宮方に十一人、大齋院方に八人となっている。これに、両御所の主の中宮彰子と選子内親王を含めれば、二十二人の人物が勅撰和歌集の作者となるわけであるが、それを個人別に分類して表わしたのが表1である。

この表をまず、彰子側からみると、中宮彰子は、後拾遺集以下新統古今集までに総二十六首の歌を残している。第二章で引用した彰子と選子の歌が社交的贈答歌であつたことからわかるように、彰子の歌はほとんど社交歌となっている。その歌風は安穏な環境に恵まれた后であつただけに、穏健で大らかなものであった。<sup>39)</sup>

次に、この日記の作者紫式部の詠歌は、後拾遺集以下、新拾遺集までに五十八首が載せてあるが、紫式部の場合、「源氏物語」本文中に詠まれている七百九十五首の歌も参考に入れなければならない。その中には、紫式部自作が疑わしいものもあるとしても、彼女は散文の物語とならなくて、和歌の韻文においても衆に抜んでたことがわかる。抒情と知性が巧みに調和しているとされる紫式部の歌とよい対照をみせたのが、同じく彰子に仕えていた和泉式部の歌なのであった。

紫式部は和泉式部を「はづかしげのうたよみやとは、おぼえはべらず」<sup>40)</sup>と否定したが、拾遺集以下二百四十八首が勅撰集に選入されたことだけでも和泉式部の歌を軽く考えてはならない。知的技巧の秀れた古今集の時代に珍しく自由な歌風で情念を歌いあげることによって、和泉式部は彰子後宮の文芸をもう一つの新しい方向へ引きあげたといえよう。紫式部が源氏物語をもって平安朝最高の散文作家として自己と主君の名声をひびかせたのと同じく、和泉式部は数々の抒情歌で当時最高の歌人の一人として奉仕したのである。

和泉式部に対しては否定的だった紫式部が、「はかなきをりふしのことも、それこそはづかしき口つきに侍れ」<sup>41)</sup>と、好意を寄せたのが赤染衛門の場合である。彰子後宮の女房の中で最年長

38) 「校訂増補 五十音引勅撰作者部類」(東京：国学院、1902)

39) 上村悦子、「王朝女流作家の研究」(東京：笠間書院、1975)、p. 37

40) 本文 p. 72

41) 本文 p. 73

〈表 1〉

勅撰和歌集		三代集			五代集				十三代集										総歌数				
作品名	人物名	古今集	後撰集	拾遺集	後拾遺集	金葉集	詞花集	千載集	新古今集	新勅撰集	続後撰集	続古今集	続拾遺集	新後撰集	玉葉集	続千載集	続後拾遺集	風雅集		新千載集	新拾遺集	新後拾遺集	新続古今集
紫式部日記	子彰部			2	2		3	5		2	2				5		1		2	1		1	26
	部式部			3			9	13	5	4	7	3			6	2	1	1	4	1			58
	和泉式部		1	71	4	16	21	25	14	16	3	6			34	7	5	7	4	4	4	3	248
	赤染衛門		1	32		8	6	10	1	6	3	4			6	2	2	5	1	5	1		93
	伊勢大輔			27		2		7	2	1	2				1	1	2		2	3		1	52
	讚岐の宰相君			1											1								2
	右近君	5	3			2																	10
	大納言の君					1														2			1
五節の君								2	2													4	
少将の君					1																	1	
宰相の君					5																	5	
中将の君					2																		2
左京の君																							2
大齋院前の御集	院進			1	7	1	1	1	1	5	3	1	3		6	2	2	1	1	1			38
	宰相(内侍)										2												2
	馬(内侍)ぶ		4	13			3	8		1	2				1	1	1	1	1	2	1		39
	兵衛近衛	2																					2
大齋院御集	右少式命婦		2	3						1													5
	修理			1																			2
大齋院御集	君の君			1			1								1								3
	輔近当			2											1			2					4
大齋院御集	大輔																						
	右別納ちど																						
大齋院御集	少納ちど																						
	くみ																						

<表 2>

作品名	人 物	出 場 歌 合
紫式部日記	中 宮 彰 子 紫 式 部 和 泉 式 部 赤 染 衛 門 伊 勢 大 輔 讃岐の宰相の 右 近 大納言の君 五 節 の 弁 小少将の君 宰 相 の 君 中 将 の 君 左 京 の 君	○寛弘年間花山法皇歌合 ○寛弘四年～五年 後十五番歌合 ○長元八年関白左大臣頼通歌合 ○長久二年弘徽殿女御生子歌合 ○寛弘四年公任前十五歌合 ○寛弘四年～五年前・後十五番歌合 ○長元五年上東門院菊合 ○治安・万寿頃或所歌合 ○永承四年内裏歌合 ○天喜四年皇后寛子春秋歌合 ○永承五年前麗景女御延子歌絵合
大齋院前御集	齋 院 進 宰 相 馬 (内侍) み ぶ 兵 衛 右 近 少武の命婦 修 理	○貞元二年三条左大臣頼忠前裁歌合 ○寛弘四年後十五番歌合 ○寛弘四年後十五番歌合 ○貞元二年三条左大臣頼忠前裁歌合 ○貞元二年三条左大臣頼忠前裁歌合 ○天曆十年坊城右大臣師輔前裁合
大齋院集	中 将 の 君 中 務 の 君 大 輔 小 大 輔 右 近 女 別 当 少 納 言 く ち きり み ど	○寛仁元年 大齋院選子内親王草合

者だった赤染衛門は、紫式部日記にたよって書かれた栄花物語の作者とも伝えられる。その歌は勅撰集に九十三首が入っているが、他女房より殊に長い時期にわたって宮仕えしていたらしく、表2をみると、その晩年にあたる長元八年(1035)の関白左大臣頼通歌合に出たことも記録に残っている。

上記の三人より少し遅れて宮仕えしはじめた伊勢大輔は、彰子の晩年上東門院の筆頭女房として活躍した。その歌は、後拾遺集以下の勅撰集に五十二首が入っているが、特に内裏歌合など数々の歌合に出て晴れの歌を詠み残した。彼女の「古の奈良の都の八重桜けふ九重に匂ひぬるかな」(詞花集、春、27番)の歌には、「女院(上東門院)の中宮と申しける時、内におはしまいに、奈良から、僧都のやへ桜を参らせたるに、「今年のとり入れ人は、今まるりぞ」とて、紫式部のゆづりしに、入道殿(道長)聞かせ給ひて、「ただにはとり入れぬ物を」と仰せられしかば」と詞書してある。これをみると、その年、中宮彰子に恒例の桜献上をする役にあたった紫式部が、新しく出仕していた大輔が歌人として評判のあることを知って、それに自分の役をゆずったので、大輔は上の歌を桜の花といっしょに奉ったのであろう。おそらく、紫式部は伊勢大輔を自負し得る同僚と見做していたらしい。

この他にも、紫式部日記の本文中に名のみえる女房は数多いが、勅撰集にその歌が載っているのは、右近(十首)・大納言の君(一首)・少少将の君(四首)・宰相の君(一首)・中将の君(五首)・左京の君(二首)のみである。

以上でわかるように、勅撰集入集という側面からみると、紫式部・和泉式部・赤染衛門・伊勢大輔等、当時最高の作家が集まっていたのが中宮彰子の後宮であった。ただし、表2にみるとおり、王朝において公式の詠歌の場とされた歌合に出て、男性の歌人たちと交わるという点ではそれほど目立たない。彰子が個人の歌合等を催して後宮女房の文芸活動を促進したのは、万寿三年(1026)出家して上東門院となつてからのことである。したがって、この頃にはすでに宮廷を退いていたであろう<sup>42)</sup>紫式部は、当然晩年の彰子をめぐる華々しい後宮を知らなかったのである。

では次に、大斎院方の文芸活動を資料によって調べてみよう。選子内親王をめぐると壇の和歌を知るには、「大斎院前御集」と「大斎院御集」の二集がよい資料となることについては前にふれた。一後宮集団から二集も家集がでたのは、紫式部のいったように、俗離れして清浄閑雅な日常生活があつてこそ可能なことであつた。

ところで、両集とも同じく選子斎院の家集とはいわれるものの、時代的には三十年のへだたりがある。まず、「前御集」<sup>43)</sup>は、永観・寛和期(984~986)における選子内親王歌壇の作品集である。連歌一組を一首として総歌数三百九十四首からなり、中心歌人としては「御」と記されている選子をはじめ、「むま」「宰相」「進」等の女房名が出てくる。他にも、「みぶ」「兵衛」「右近」「少式の命婦」「修理」「近江」「すけのめのと」等の女房名もみえるが、大して注意を引く人物ではないよう

42) 今井源衛、前掲書、p. 225

43) 以下、「大斎院前御集(だいさいいんさきのぎよしゅう)」を「前御集」、「大斎院御集(だいさいいんぎよしゅう)」を「御集」と呼ぶことにする。また、この両集に関する資料としては、○秋葉安太郎・鈴木知太郎・岸上愼二共著「大斎院前御集の研究—いわゆる馬内侍歌日記」日本大学創立70年記念論文集 第一巻 人文科学編、(1960)○杉谷寿郎「大斎院とその家集」、『国文学』1965.10 ○橋本不美男「大斎院 御集の性格」、『言語と文芸』1960.5 参照



である。この集の歌数はかなり多いものといえるが、その中で勅撰集に入集されたのは五首にすぎない。それも、十二番歌「やまぎとのはなのにはほひのいかなれやかをたづねくるうぐひすのなき」(新勅撰集、雑歌、1025)と、二十五番歌「はるはまたかすみにまがふやまぎとをたちよりとふひとのなきかな」(後拾遺集、春上、40)、三百四十番歌「ことのねのはるのしらべにきこゆればかすみたなびくそらかとぞ思ふ」(新勅撰集、雑一、1118)の三首は共に選子の詠みであって、二百五十六番歌「秋のよの露おきまさる草むらにかげうつりゆくやまのはの月」(新勅撰集、秋下、284)と、三百四十番歌「ことのねを春のしらべにひくからにかすみてみゆるそらめなるらむ」(新勅撰、雑一、1117)の二首が宰相の歌となっている。馬内侍の場合、「前御集」の歌からの入撰はないが、勅撰集に四十三首が入集されている。この人は、選子内親王にだけでなく、村上朝には齋宮女御徹子に、円融朝には中宮嬪子に、それぞれ仕え、一時は中宮定子の後宮にも出仕したといわれる。表1をみると、拾遺集以下新後拾遺集までの勅撰集に四十三首が入集されているが、その華麗な経歴と才能で、当時の大齋院方でもっとも目立った人物であったと思われる。

さらに、表2から「前御集」時代の女房の歌合での活躍を調べてみると、まずさきに宰相と馬内侍が寛弘四年十五番歌合に載っているのがわかる。これは、藤原公任が同時代の歌仙三十人の秀歌各一首ずつを左右に番つた歌合であるが、馬内侍と和泉式部の歌が二番の組になっている。それから、貞元元年(1028)に三条左大臣頼忠が催した前栽歌合の女房に進・馬内侍・右近の名がみえる。

以上のように、「前御集」時代の女房たちを、平安時代文学の最高権威ともいえる勅撰集入集と歌合出場の側面から考察してみたが、とりたてていうほどの成果はなかったとみられる。しかし、この集の成立当時、選子内親王は二十才を越えたばかりであっただけに、齋院を確固な文学集団とリードしていくにはまだ年若かったのである。それに、齋院という独特な御所柄、どうしても宮廷生活圏から隔絶していて、公卿・殿上人および他の後宮と接触する機会が多くなかったため、その和歌の質を向上させることはむずかしかつたと思われる。「前御集」とは違って、選子齋院が大齋院という世評にふさわしく活発に動いた時期にできあがったのが「大齋院御集」である。

「御集」は、長和三年(1014)から寛仁二年(1018)までの時期の選子齋院女房の家集であって、連歌一組を一首として百三十五首からなっている。先に、齋院の活発な動きとあったが、それはつまり外部と頻りに接触し、文学の交わりをもつたことを意味する。「御集」の成立当時、選子は五十代になっており、すでに四十年間も賀茂齋院を守り続けていた。時の摂政関白と常に相互関係にいた選子の御所には、自然に多くの公卿・殿上人など外部の人々が訪れてきた。「御集」の大半が外部の人々と齋院女房たちが交わした連歌になっているのも、そういう事情によるのである。例えば、十九番歌と二十番歌の贈答や、四十七番歌、五十番歌の詞書にも、選子内親王を中心とするひとつの文芸サロンの性格がよく表われている。この集の中心女房は、中務・中將・大輔・小大輔・右近であり、他に女別当・くちき・みどり・宣旨・民部・小中將の君・大弁等の女房名もみえる。

ところで、「御集」の女房の中で、その歌が勅撰集に入集されているのはわずか中務と中將の二人にすぎない。表1でわかるように、中務が後拾遺集以下に五首、中將が後拾遺集、千載集、新後撰集にそれぞれ一首ずつ入ったのみで、他の女房の詠歌として入撰されたのは見あたらない。

要するに、勅撰集の撰者の目からみると、「御集」当時の女房の詠歌はそれほど高い水準ではなかったらしい。また、歌合出場の状況の方は表2が示しているように、皆無とってよいくらいである。紫式部がこういう事情を知ってから日記に「齋院よりいできたる歌の、すぐれてよしよしと見ゆるもことに侍らず」と書いたかどうか確かめがたい。ただ、大齋院御集の時代、すなわち彰子後宮と相並んで文芸集団として働いていた時代の選子御所は活発で華やかな雰囲気ではあったが、和歌の側面から考えれば、紫式部の主張したように、必ずしも他後宮に抜んでいたとはいえないであろう。

#### IV. 結び

一般に、紫式部日記の製作意図については「主家の栄華の記録」<sup>44)</sup>がまず考えられる。言うなれば、作者の紫式部が中宮彰子に仕えながら、皇子生誕という慶事を見届けた感興を書き残したのがこの日記なのである。たしかに、行事や盛儀を記録した部分においては、中宮をはじめ、父道長・弟頼通等主家の人物を讃美し、その繁栄を祈る姿勢になっている。忠実に主君に従った宮仕え人の精神は、この日記の作者の場合にも変わりがなかった。しかし、紫式部は愛仰の心で主君に仕えはいたが、彰子後宮の気風には相当反発感をもっていたらしい。それに、我が方に対する世評がたいして好ましくないことは、彼女の不満をもっと深くしたのである。そういう複雑な感情がたまたま選子齋院の中將の手紙を盗み見するにいたって爆発した結果書かれたのが、この中將の君の段ではないだろうか。言いかえれば、大齋院の、風流で社交性に富んでいる雰囲気を感じた中將への反撥と、中宮御所を無風流で社交性の欠いた所と見なす世評への弁護と抗議こそ、この段を書かせた原動力になったのである。そういった反撥は、単に中將の君という個人を対象にしたのにとどまらず、選子内親王の齋院全体に対するものであることはいままでもない。

摂関制度下の宮廷に呼ばれた女房たちが、それぞれ各後宮の文化の担い手として働いた世界では、対他人意識も鮮明になってくる。つまり、各後宮内部では勿論、同時代に並存する諸後宮間にはお互いに好悪の区別ができ、競争心、敵対心も激しかったと考えられる。紫式部が、この中將の君の段において表わした情緒もそういった範囲に入れるべきではないだろうか。

日記の作者は中將の君の手紙を反駁するために、ふたつの論点すなわち風流と社交性のことをあげている。そうして、彰子後宮と選子齋院のそれぞれ異なった状況、そこから当然生じてくる雰囲気をひとつひとつ分析し批判した後、決して我が方が才能のない無風流なところではないという結論を出したのである。宮仕え人としての能力を知るすべとなっていた機知と積極性の側面では、我が方が他後宮のそれより劣るのは現実の状況上止むを得ないことである。しかし、文芸集団としての才能の側面ではどの後宮をも上回ると、作者は自信をもっていたに違いない。そして、この段の文章の底辺には、環境の事情で持ち前の才能を十分発揮できない不遇感と、相手方の大齋院への羨望・憧憬・嫉妬心等々が複雑に絡まっている。

本稿では、まず、中宮彰子の後宮と選子齋院の実情を概観し、当時の諸後宮の関わりについて調べてから、それが作者の主張しているように後宮女房の文芸活動に大きな影響をもたらしたかどうか考えてみた。この際、考察の対象になる時期と人物を、紫式部の出仕を前後として範囲をしばったのは、紫式部日記の持つ限界を考慮に入れたからである。さきに才能といったが、それ

44) 秋山虔、「王朝文学史」(東京大学出版部、1984)、p. 188

は当時文芸の主軸となっていた和歌のことをさす。したがって、両御所の各女房の作歌活動を調べることによって、集団間の比較と個人の優劣がある程度わかると思う。

男性の宮人たちと違って、後宮の女房に関する記録は非常に乏しいので、考察の対象になったすべての女房を確認することはむずかしかった。ただ、和歌についての諸資料中、もっとも公式的権威のある勅撰和歌集と歌合の両方面に実名を残す人物をひとつおり調べてみた。そのようにして、この日記の作者紫式部が本文中に繰り返して力説したこと—彰子後宮が決して風流と才能のない御所ではないということを確認できた。これは単に中宮彰子方と選子内親王方の女房の作歌を数値上で比較したことのみを意味するのではない。紫式部・和泉式部・赤染衛門・伊勢大輔といった日本文学史上の代表者たちが、同時代に同集団から出た事実を考えるには、個人の才能と合わせて当時の特殊な状況をも考えなければならないということである。要するに、藤原摂関勢力の伸張を背景として、諸後宮は相互に軋み合いながらそれぞれ一文芸集団となっていたのである。

### 参 考 文 献

- 萩谷朴、「紫式部日記全注釈」上・下(東京：角川書店、1971)
- 今小路覚端、「紫式部日記の研究」(東京：有精堂、1977)
- 南波浩、「紫式部集全評釈」(東京：笠間書院、1983)
- 今井源衛、人物叢書「紫式部」(東京：吉川弘文館、1980)
- 秋山虔、「王朝文学史」(東京大学出版会、1984)
- 赤木志津子、「平安貴族の生活と文化」(東京：講談社、1964)
- 上村悦子、「王朝女流作家の研究」(東京：笠間書院、1975)
- 池田亀鑑、「平安時代の文学と生活」(東京：至文堂、1976)
- 日本文学研究資料刊行会、「枕草子」(東京：有精堂、1970)
- 橋本義彦、北山茂夫、岩波講座「日本歴史」「古代4」(東京：岩波書店、1962)
- 土田直鎮、「日本の歴史」5(東京：中央公論社、1965)
- 塙保己一、「群書類従 卷第四十四 齋院記」(東京：国書刊行会、1819)
- 「古事類苑 神祇部 六十四」(東京：神宮司廳、1898)
- 新編国歌大観編集委員会、「国歌大観 第一巻、勅撰集編、第二巻 私家集編」(東京：角川書店、1985)
- 犬養廉他、「和歌大辞典」(東京：明治書院、1986)
- 黒板勝美 新訂増補 国史大系 第五十八、五十九、六十巻「尊卑分脈」(東京：吉川弘文館、1964)